慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	沖縄舞踊の歴史的背景について (その3) : 祭りと芸能
Sub Title	Historical background of Okinawan dances (III) : festivals and performing arts
Author	清水, 富士子(Shimizu, Fujiko)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1985
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.25, No.1 (1985. 12) ,p.19- 29
JaLC DOI	
Abstract	.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00250001-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

沖縄舞踊の歴史的背景について
(その 3)
―祭りと芸能―

清　水　富　士　子*

1. はじめ
2. 古代の神の観念
3. 島々の祭り
4. 祭りと芸能
5. むすび

1. はじめ

世界の芸能の中で，独特の地位を占める沖縄は，芸能の宝庫といわれるだけあって，様々な歌と踊りが人々の生活の中に息づいている。

その特色は，おしなべて古風，濃い郷土色があげられ，歴史と信仰に裏づけられた自然発生的なもの，又，風土，伝統の特殊性の中に置いてみるべきかと思われる。

今日各地に伝承される様々な民俗芸能[(1)]をみると，おおよそ，それぞれを母胎とした祭りの儀礼の要素をどこかに残しており，民俗芸能の様々なかたちの成立と，その展開のあとを見ていくには，祭りとのかかわり，そして，その祭りからどのように展開していったかを観察していくのが，もっともわかりやすい方法かと思われる。

沖縄舞踊の歴史的背景をしらべるについて，まず，芸能を大きく分類すると，祭祀芸能，民俗芸能，古典芸能の三つになる。

その沖縄の芸能は，さかのぼって古代からみると，農耕社会を背景にした祭りの場で生まれ，育っていることを特徴にしている。

農作物の豊穣に感謝し，あらたなる年の豊穣を予祝するため，遠来の神を寿ぎ，歓待する場に芸能の芽は育って行ったのである。

そこで，沖縄芸能における舞踊の原流，内容を一層深く認識するために，祭りの中で，その

* 慶應義塾大学体育研究所助教授

生い立ちを考えたいと思い，今回は，祭祀芸能，そして民俗芸能について諸文献を参考にして，本論文をまとめた。

注 (1) 三隅治雄・西角井正大・仲井幸二郎編『民俗芸能辞典』東京堂，昭和56年，24頁～32頁。

2. 古代の神の観念

沖縄の島々にいつ頃から人類が住みつくようになったのかは定かではないが，考古学(2)や人類学の研究により，かなりの古さにまでさかのぼることができる。

人類が地上に現われ，生活をはじめた原始時代(3)では，神への祈りだけが，唯一の心の支えであったことは，だれしも想像できることである。

その祈りの儀式を呪術といい，超自然の力をかりて目的，願望を達成しようとする行為といえる。それは，まさに，狩猟，漁撈，農耕，治病，争い，災厄防止など，未開社会のあらゆる日常生活に深く結びついていたことである。

祈りが高潮し，人々が放心状態になった時，神がかり的な動きが始まり，その結果から効果があった時，人々は神の奇蹟と，祈禱の神秘性を肯定して行ったのである。

やがて，それらの動きが統一され，個々の動きは集団として発展していくようになると，人々の中から，自然発生的にそれを統括するリーダーの役目をする人が必要とされる。

これが「巫女(4)」であり，古くはかんなぎと呼ぶ。その巫女たちの神がかり的な動作が「舞」という芸能の，大きな母胎になっているといわれている。

祈りの表現の場は，お嶽(5)（ウタキ又はオン），御願所，などの拝所や部落の「あしやげ」のある広場などで演じられた神への奉納のである。それゆえに，これらの芸能を芸術の分野としてみるのではなく，宗教的，信仰的行動，動作による神との対話の方法であったと考えられるのである。

そこで祭りに迎えられる神(6)はいったいどこから来るかということだが，これは，すむ土地の環境や，時代時代の人々の考えによってさまざまに変ってくる。たとえば，四方を海に囲まれ，村落をその海の見える平地や丘に構えることの多かった我国の古代においては，人々は，遠く海の彼方におのが魂のふるさとともいうべき美しい楽土のあるのを空想して，その楽土から，ことあるごとに神を迎えた。

沖縄では浄土(7)を「ニライ　カナイ」（儀来河内），その主宰神をあがるいの大神（うふぬし）といい，あがるいは東方という意を含んでおり，東海に，あるいは天国に，と同じように楽土を想像していたようである。万物に霊ありとするアニミズム的な考え方も，少くとも慶長（1600年）

のころまではおこなわれており，沖縄の信仰と芸能は，本土の南限を示すものと思われる。[8]

次に神に関する言葉から，その内容についてふれてみると，

(イ) ミセセル，オタカベ，その他[9]

生産力の低い原始社会では，生産と直接かかわりあっている自然との対決が常に大きな社会問題であり，調和したり克服しようとするための祭りや呪術が盛んに行なわれた。

超人間的な力を持つ神にすがることで自然の威を乗り越え，生産豊穣の予祝をしようとする願望が，神祭りにおける呪詞となって発達するようになる。その呪詞がいわゆる宣り言であり，豊穣を願う切なる緊張を，言霊信仰に基づく「はれ」のことばで表現しようと努めるところに，あらたなる呪詞の発展が約束されるのである。

このような人と神，神と人との心を繋げる呪詞が，沖縄の島々では，お崇べ，宣立言，御宣せる，思い，照るく口，神口，願い口などと呼び分けられながら，今でも生き残っているのである。[10]

それらはすでに化石化しており，自律的な発展性を持ってはいないが，うっそうとした御嶽の中で，巫女によるひたぶるな呪言のくり返しが行なわれ，神との交感を感じるのであろう。

呪言を発する主体としての「まれびと」は，沖縄では，「まやあの神」「真世加那志」「赤またあ，黒またあ」などと呼ばれ，海の彼方から幸福をもたらす神として広く知られている。

(ロ) 祝女，司[10]

奄美，沖縄諸島で公儀の祭祀をつかさどった女神職を「ノロ」という。一村または数村に一人の割で置かれた。農作物の儀礼にはノロが中心となり，その村の根神や他の神女たちを従えて行事を行なった。ノロは村行事に参加し，司祭するのが本分であり，ノロの住む家をノロドンチ（殿内）といい，そこには職能神としての火の神を祀っている。

村の草分けの女神職である根神や一族の神女であるクデは，祖霊を守護神とするといわれるが，ノロは火の神を守護神とした。宮古，八重山にはノロと称するものはなく，ツカサ（司）と呼ばれる女神職が村々にいて，御嶽の司祭をつとめた。

本土の信仰では，神を降ろすには，柱，榊，松，幣束などを神座とし，あるいは巫女が神がかりして巫女自体に神を招いたものであるが，沖縄では神座を設けず，もっぱら祝女・司などと呼ばれる巫女に神を降ろした。

後に述べる，ウンジャミ祭りの神を例にとると，この祭りの中心となるのは女性である。祭りの当日，各地の集落から祭祀女が祖先の原住地かと伝えられる丘陵地の森に集まり，神あしやげと称する四方吹抜けの瓦ぶきの建物の中に入って身仕度をする。シルジン（白衣）と称する白麻の打掛けを羽織り，頭に白布を巻く。そして，藁に葛を巻いてつくったガンシナをその

上に巻く。これは女たちが，わが身に神を依りつかせるための仕度である。

身仕度をととのえた女たちは，神あしやげの中に列座し，用意された御嶽の清水で額を二度撫でる。これを「御水撫で」の儀式というが，これは清水の中にこもる神霊をわが身につける，いわゆる「神がかり」儀礼の一つで，こうすることで女たちは，ただの人間から神そのものに変身するのである。

人が神に変わるなど，現代のわれわれには理解できないことだが，祭りの世界では実現するのである。

現実に「御水撫で」を終えた女たちは，ここで改めて，ノロ神，若ノロ神，根神，ピラムト神，遊び神，アジ神などの神名が与えられ「生き神」として一般参詣者に対するのである。御水撫での後，居並ぶ神達の前にあちこちの集落から集まってきた，各血縁集団（門中とよぶ）を代表する男たちが恐る恐る膝行して，うやうやしく拝礼し，神酒の入った盃をその神たちから戴くのである。

伝承では，生き神たちは各血縁集団の先祖神で，その神たちへ子孫の代表者が感謝を捧げ，あわせて神のセジ（霊魂）を生き神から戴く，というのがこの盃ごとの趣旨だという。

日本の古代社会でも，女性がムラの祭祀をつかさどり，男性がその指示によってムラの政治を行なうという体制があったが，沖縄の祭りの中に，そのかたちが生きている。

(ハ)　ニライ・カナイ　アマミキヨ

「おもろさうし」[11]の中には，ニルヤカナヤ，ギライカナイ（儀来河内）としてあらわされている。

伝承では，アマミキヨ（人間の先祖といわれる神）が天からおりたのは，沖縄本島東南海岸にある久高島だといわれているが，大昔南から渡って来た人びとが，この島につき，その後，対岸の知念岬斉場御嶽に移ったものと考えられている。これは，九州―大島―辺戸岬と北からさがって来た南進説に対する，南方民族の沖縄渡来説，いわゆる北進説であるが，そうした伝承にふさわしく，久高島は今でも「神の島」とよばれ，古い風俗を残している。

辺戸岬のアマミキヨ神話のアマミが，奄美大島のアマミで，キヨは方言のチュ（人）と解釈するのに対し，久高島説のアマは遠いところをさす「あなた」のなまりで，ミは海，キヨはチュ（人）つまり「遠い海から来た人」とされている。アマミキヨ神が上陸したところと伝えられるところは，島の人びとは，神が住みたもうたところとして神屋原とよんで神聖視していたが，太平洋戦争で米軍が焼き払ってしまった。

ニライ・カナイ，そしてアマミキヨは，民族や神々の出どころである「根」を意味する信仰のだいじな部分で重なり合っている。

(ニ)　オボツ・カグラ[12]

「おもろさうし」にみられる「おぼつ」は，常に地上世界と対応して観念化された天上世界である。おもろの古い辞書である「混効験集」[12]にも「天上のこと」と記されており，オボツが天上の聖域で，神の在所と信じられている。又，宮廷の祭祀儀礼歌として編集された「おもろさうし」巻一に，特に強調されていることからみて，天界の神と地上の王権を結ぶ意図がはっきりしており，これは尚真王の頃の中央集権と王権強化の時代を反映しているものとみられる。

このように，古代の人々に信仰された神々は，現代の人々の生活の中で営まれている年中行事や，祭りの中で，時代のうつり変りと，地域的偏差をうけながら生きているはずであり，行事や祭りの意味と性格を分析していくことは，沖縄芸能史の理解を深める貴重な資料となるのである。

注 (2) 沖縄文化協会，沖縄民芸協会，沖縄芸能協会編「沖縄の伝統文化」沖縄タイムス文化事業局，昭和50年，255頁～257頁
(3) 川平朝申著「沖縄の歴史」月刊沖縄社，昭和58年，10頁～12頁
(4) 花柳滝蔵著「日本舞踊小史」日本フォークダンス連盟，昭和54年，12頁
(5) 下中邦彦著「風土記日本」第１巻，平凡社，昭和50年，316頁
(6) 前掲(5)書，299頁～302頁
(7) 玉城義弘著「沖縄の民俗文化」沖縄タイムス社，昭和56年，20頁
(8) 伊波普猷著「伊波普猷全集」第５巻，平凡社，昭和49年，255頁
(9) 前掲(8)書，256頁
(10) 大島暁雄，佐藤良博，松崎憲三，宮内正勝，宮田登著「民俗探訪事典」山川出版社，昭和58年334頁
(11) 外間守善著「沖縄の歴史と文化」ＮＨＫ市民大学講座，昭和59年，35頁～37頁
(12) 前掲(10)，38頁

3. 島々の祭り

祭りは，いうまでもなく，自分の生命とムラの生活を護ってくれる神，あるいは，自分たちをおびやかす厄神などを迎えてもてなす儀礼で，季節の折り目，婚礼，新築祝い等の祝事や，旱魃，飢饉，疫病など不時の災害の起きた時などにもよおされた。

それらの祭時には，それぞれの目的に応じた祈願，呪禱の儀礼作法が行なわれたが，その儀礼が，じつは，発生的にみると，のちに芸能とよばれる行動を生む種子となったのである。

沖縄は古風な祭りが多い。現在行なわれている数多い年中行事[13]の中から，芸能をともなう主な祭りをぬき出してみると，次のようになる（月・日は旧暦による）。

○正月二十日　　二十日正月

那覇市辻町にあっては尾類馬（ずりま）行列がある。この日は正月の終りであるとして，なごりを惜

しみ，ご馳走をつくり一夜歌舞音曲を奏する。

○３月３日　　三日遊び

女の節供と言われ，沿海の部落では女子が浜に出て遊び，舟遊びをし，鼓を打って歌舞をする。

○４月～５月　　腰休み

農事，又，以前は製糖などの作業が一段落した時に仕事を休み，祭りを行なう。男子による歌舞音曲の催しや，棒踊り，手踊りなどがある。

○５月４日　　爬竜船

ユツカヌ日といい，海岸部落中，漁業の盛んな所では海神を祭り，爬竜船を催す（糸満，港川，塩屋，平安座など）。船歌をうたう。

○６月中　　豊年祭

この祭りは３日間続く。第１日は前年の豊作祈願を解く祭り，中の日は今年の豊作を感謝する祭り，後の日は来年の豊作を祈念する祭りである。祭りにはアカマタ，クロマタを出す。八重山の豊年祭が一番盛大のようである。巻踊りをしたり，綱引きや村芝居を行う。

本土には豊年予祝の祭りはあるが，感謝の祭りというのは，雨乞感謝を除いてはほとんど見あたらない。

８月の結願祭。８・９月の節祭，９・10月の種子取り祝いなど，すべて農耕に関する祭りである。このように沖縄に農耕の祭りが多いのは，いかに食糧が乏しかったかを物語るように思われる。

○７月　　精霊祭，海神祭，シヌグ，ワラビミチ

13日より15日にかけて精霊祭（盆の行事），アンガマ，念仏踊りの催しがある。16日にはエイサー（盆踊り）がある。

○８月中　　結願（けちがん），柴差し，テルクロ（ぐち），八月踊り

島により毎年，又は隔年おきに結願の祭りを行なう。弥勒，棒踊り，獅子舞い，狂言，舞踊などの催しがある。

十日柴差し。魔除け，鎮魂とも考えられている。神人が全部あしやげに集まり祈願をし，屋内に円陣をつくり，オモイを歌いつつ踊る。又，テルクロ遊びをする。15日夜，棒踊りや村芝居を行う所が多い。そして，この日から16日にかけて，女たちの臼太鼓がある。ただしこれは毎年というのではなく，隔年，４，５年などに一度，豊年の時などに行う。奄美諸島では，この15日前後，八月踊りが盛んに踊られる。

○８・９月　　節（しで）祭り

八重山では節祭りにマヤヌ神を祭る。

爬竜船と巻踊り，アンガマ踊りを催す。

○９月９・10両日

大島郡硫黄島では，鎮魂のため，女たちが九月踊りを踊る（俊寛の霊を慰める）。

○９・10月　　種子取り

１週間にわたる種子取り祭りがあり，２日間の村踊りがある。

○10月　　曲玉祭り

八重山郡島与那国島に，25日にわたる祭事があり，そのための舞踊がある。

○12月14日　　イザイホー

12年に一度，久高島に行われる。沖縄の祭の中で，最も華麗で洗練されたものといえる。

以上，年中行事は，このような農耕儀礼と関連づけて考えられるほか，祖先祭りや，家内の健康を祈り，邪気を払うもの等があるが，その意味あいは複雑にからみ合い，今後の研究，検討がまたれるものである。

沖縄の島々の古い祭りに関しては，諸文献の各処祭祀の章にひととおり（嶽の名，神名，いつ，何のために祈願するか，祭りを行う人々，供物や所によってはその祭詞や神歌や神託，嶽々の由来）記載されているが，惜しいことには，祭りに行われた芸能のくわしい様子，特に踊りについて等は，ほとんど明らかにされていない。ただ，長々とミセセル（神託）を記し，「此言葉ニテ謡舞ナリ」，あるいは，「諷躍也」とか，「臼太鼓ノヤウニ立備ヒ」「神遊仕タル処」などとあり，詳細については記されていない。

体育研究所紀要第23巻第１号にも述べたように，特に舞踊について古くそのようすをうかがい知る唯一の文献として，十二世紀から十七世紀にかけて島や村で謡われた歌謡を採録，編集した最古の歌謡集「おもろさうし（双紙）」がある。

全22巻であり，古語を使用したいろいろの形式の歌を，特殊な表記法を用いて書かれてあるため，その解明は極めて困難であり，おもろ解読のための古い辞書，「混効験集」[14]などがあるが，十分に利用できないのが現状である。

歴史書のなかった時代の琉球社会の思想や古語を知るうえにも，きわめて貴重なものとなっている。おもろという言葉は，人間の胸中の思いを意味する語で，感情の激発するままに流れでる言葉をつづった歌である。その起源は，古琉球の固有信仰に発し，女神官であるのろ「祝女」の語るミセセル（神託）から分化発達したものとされる。

「おもろさうし」巻九の「いろいろのこねりおもろ」，同巻十二の「いろいろのあすびおもろ」，同巻十四の「いろいろのえさおもろ」などには，動きの解説がみられる。

こねりは手の屈折を意味し，ひいては舞の意味にも用いられた。

あすびは神遊び（歌舞）を示し，えさはいわゆるエーサで，盆踊風の集団舞踊である。

この双紙に採録されなかった神歌，ミセセル，オモイなども，今日なおわずかに伝承され残っているが，これらに合わせる舞踊は，振りの簡素，古風なもののようである。

踊りの技術的な面については，拝み手，押す手，こねり手，この三つが琉球舞踊の基本をなすものとされる。[15]

注 (13) 前掲(11)書，38頁
(14) 前掲(5)書，312頁
(15) 宜保栄治郎「琉球舞踊入門」那覇出版社，昭和54年，339頁～342頁

4. 祭りと芸能[16]

沖縄の芸能の起源については，さだかではないが，かなり古い昔から芸能らしきものがあったことを諸文献，伝承よりうかがうことが出来る。

人類が地上に現われ，生活をはじめた原始社会のころから，感情の表現や，意志の伝達の方法として，肉体（肢体）による振りや跳躍で喜怒哀楽を表わしたものであり，それがいつしか芸能といわれ，舞い，躍り（踊り）あるいは舞踊となったのである。

はじめに述べたように，沖縄の芸能は，大きく三つに分類され，次のようになる。

祭祀芸能[17]

神祭り，神々の呪縛の中にあった古代祭祀の中で，生産を意味する模倣儀礼。いわゆる自然発生的なもの。

ウンジャミ（海神祭），シヌグ，イザイホー，ウヤガン（祖神祭），ユークイ，赤また・黒またなどがある。

民俗芸能[18]

村人たちによって演じられた豊年に根ざす神歓待の祭り。又，念仏衆が島に来て伝えたかと思われる念仏踊りを中心にした風流系統のものとして，

ウスデーク（臼太鼓），エイサー，タナドウイ（種子取り祭り），巻踊り，クイチャー（雨乞い踊り），アンガマ，念仏踊り，南島（はえのしま）踊り，獅子舞いなどがある。

古典芸能

古典音楽，古典舞踊，古典劇がある。これは，いわゆる宮廷舞踊の流れである。宮廷舞踊の成立は，祭祀，民俗芸能を基盤にして高度に洗練され，本土から仕入れた風流踊りと共に発達したもので，神楽，冠船踊り，端踊り，組踊り，八重山歌舞などがある。

これら（祭祀芸能・民俗芸能）の中からいくつかの内容にふれてみると，それは，

○ウンジャミ（海神祭）

沖縄本島北の国頭村比地にウンジャミ祭りが行なわれる。ウナイウガミといい，女を拝する祭りという。これに対し，シヌグをウキーウガミといい，男を拝する祭りという。ウンジャミとシヌグは，年々交互に行なわれるが，古くからの祭りであるため，祭りを行なう場所により順序がまちまちである。豊漁，豊猟の予祝であり，旧暦七月の盆過ぎに，三日崇べの儀礼(神迎え，航海―漁撈―猪狩りの模擬，神送り）で構成され，ニライカナイへ神を送った後，あしやぎ庭で，婦人達の臼太鼓へと移るのである。

○シヌグ

ウンジャミの女性中心とは対照的に，シヌグは男性中心に構成されている。沖縄本島の北部や中部東海岸の島々，又，奄美諸島の沖永良部島，与論島でも行なわれている。シヌグの儀礼は「邪気祓い」というが，その本質は，やはりウンジャミと同じ豊穣予祝の儀礼である。夜は臼太鼓があって，この式は終る。

○ウスデーク（臼太鼓）

これは女性だけで踊られるもので，シヌグ，ウンジャミ祭りの構成要素である。芸態は，鼓を持った音頭取を先頭に，女性が続き，村のあしやげ庭で円陣を組んで踊る。円は左廻りに輪をかくように進み，歌は琉歌，踊りは，拝み手，押す手，こねり手など，祭祀舞踊にみられる手が入っている。

○エイサー

沖縄本島とその周辺の離島で，旧盆の15日～16日にかけて行なわれる盆踊り。踊る時に発する「エイサー」の掛け声に由来している。左廻りの輪踊りで，大和の風流踊り系のものだといわれている。

楽器は三線，大太鼓，パーランクー（半胴の小鼓）などが使用され，男女混成の舞踊である。男性は楽器を勇壮に打ち鳴らし，女性は音曲にあわせて舞い踊る。

○イザイホー

久高島で12年に一度，午年の旧暦11月15日から５日間にわたって行なわれる祭りである。久高島で生まれた30歳から41歳までの全女性に，神に奉仕する神女としての資格を与え，島の祭祀集団に入ることを認める儀式である。

祭りは，イザイホーの１か月前に行なわれる「御願立」から始まる。祭りの５日間は，ニライからの来訪神をお迎えし，歓待し，祝福を受け，またお送りする，という構成になっている。

祭祀集団に入ったことのおひろめに「花さしあしび」の円舞が催される。

○赤また・黒また

八重山の新城島，西表島の古見，小浜島，石垣島の宮良で行なわれる秘祭である。赤，黒に加えて白また（古見）や子供の赤・黒の出るところもあり，それぞれ草装の仮面神が海の彼方のニーラスクから世（豊饒）を携え来訪する，というものである。

祭りの前日，世の首尾，願解ぎ儀礼をうけて，来年の豊饒を祈願する来年の世願いがある。この祭りにアカマタ・クロマタ神が来訪するわけで，祭祀集団の成員として入団しうるか，否かの審査をする儀礼も伴っている。このため，共同体内の男子青年にとっては，一つの通過儀礼となっている。これらの諸儀礼については門外不出であり，公開，研究については厳しい禁止がある。そのため，この集団をいわゆる秘密結社的なものとしている。(19)

○クイチャー

宮古島に伝わる芸能で，クイチャーアーグにのせて踊られる集団舞踊である。地域によっては男女が別々に組をつくって円陣になり，クイチャーアーグを掛けあいながら踊る。踊りは激しく，強い手拍子と足拍子，それに跳躍，旋回を基本動作にしている。古い昔は，つかさうま（老祝女）が白衣で御嶽に詣り，踊りが始まると輪の中に立ち，ミセセルを歌い，舞い踊っていた。八重山にもあるが，豊年祭の時踊られるほか，臨時の雨乞い，祝宴のときなどにも踊られる。

この踊りは，一連の踊りのうち，手振りがいろいろに変り，拍子もしだいに早くなり，アイヌのリムセを思いおこすようである。(20)

などがある。（古典に関する内容について今回はふれない。）

注 (16) 前掲(11)書，83頁～87頁
(17) 前掲(11)書，39頁～45頁
(18) 前掲(5)書，304頁～308頁
(19) 前掲(5)書，304頁
(20) アイヌ語で舞踊は，ホリッパまたはリムセ・ヘチリ（樺太）などといい，シャーマンの神がかりの激しい身体運動から起ったといわれ，まだ原始の意味を忘れてはいない。タップラカの踏みしめる動作や，ホリッパ（輪舞）の呪術的強歩行進などが代表的なものである。

5. む　す　び

沖縄の各地に伝わる祭りをこのように調査してくると，年中行事，祭りのほとんどは，豊穣予祝と感謝を基礎にしたものであるということがわかる。

祭りの式には，神事と芸能がはっきりしない部分を含んでいるものもあるが，宮古の祖神が草装神であり，八重山のアカマタ・クロマタが仮面草装神であることの共通性や，イザイホー

とアカマタ・クロマタに祭祀集団への入団儀礼がみられること等，いずれも豊穣予祝のための祭りを支える構成要素の一つとしてみることが出来る。

地理的にみると，沖縄は日本列島の最南西に位置する全域亜熱帯地域の島々で，本州あたりではみられない南方独特のものがある。

文化の色合いも，本州とはほど遠く，地理的に中国や東南アジアに近いだけに，それらの国々からの文物を多く受け入れる歴史を重ねて，中国色や南方色を色濃く泌みこませている。しかし，それでいてなお，地理的隔絶と交通不便なことから，本州では失った日本文化の古代的要素を島々の生活の中に残しているのは，紀要第24巻第１号にも述べたごとく，ここに住む人達が，日本民族の伝統を純粋に受け継いでいるためであろうと思われる。しかも，鋭い感受性と，感じたことを素直に体とことばで表現する能力を持ち合わせた人が多く，この人達によって催される祭儀には，日本の芸能の始源を想像させる要素がいくつも認められ，貴重な資料となるのである。

そして又，はじめに述べた祭祀芸能，民俗芸能，古典芸能の三様が，同時代に共存し，現代にまで生き続けているのは，沖縄における伝統芸能の偉大な特徴といえる。

以上，沖縄舞踊の生い立ち，原流を，古い昔の祭りとのかかわりにおいて，調査したものである。次回は豊年予祝の民俗芸能から，洗練された宮廷芸能への移行の実態について，更に深く追求して行く心算である。

終りにあたり，本論文の指導をいただきました体育研究所教授笹島恒輔氏に記して感謝の意を表します。